

平成30年度第1回ニセコ町総合教育会議 議事録

日 時 平成31年3月1日（金曜日）
午後3時45分開会～午後5時15分閉会

場 所 ニセコ町総合体育館会議室

出席者 片山健也町長、菊地 博教育長、日野浦あき子教育長職務代理者、
下田伸一委員、越湖明美委員、萬谷政博委員

会議概要 以下の通り

1 開会、2 町長挨拶

片山町長：本日、ニセコ高校の卒業式が行われたが、この体育館の改修をもって教育施設の大きな改修がほぼ終わった。町全体でも各施設の長寿命化を図り、ライフサイクルコストを計算するなど、管理計画の策定を現在進めている。道路を含めた全ての公共施設が対象となるが、これによって町全体でどの程度の予算を組んで、どこに充てていけばよいか分かる。将来に渡って見える化をしながら財政運営していきたい。また、教育については、教育委員にも全国各地を視察するなど尽力いただいているが、次のステージにどのように向かうかについて、教育委員同士の意見交換を通じ、教育委員会としての提案を受けながらまちづくりを進めていきたい。本日は宜しく申し上げます。

3 議事

片山町長が議長として議事を進行。

(1) ニセコ町の予算概要についての報告（町長）

片山町長から、平成31年度ニセコ町予算案の概要について説明。

片山町長：過去、全会計で70億円を超える予算規模になったことがあるが、平成31年度は近年でも最も大きな規模となった。各課での働きにより、総合的な財政状況は好転してきている。また、町政懇談会資料にもある町の人口推移を見ていただくと、全体で微増状態が続いていると共に、外国人住民も増加しており、約36カ国の皆さんが現在ニセコに住まわれている。特に、イギリス、オーストラリア、中国からの方が多い。外国人来訪者も、町への視察などを含めると50カ国を超えている。海外から移住されても安心して住める町を目指していきたい。続いて、町政懇談会資料にある町の財政状況を見ていただくと、職員の努力により国の補助金を活用するなどしてGDGsの調査事業などにも取り組んでおり、事業量は増え

ているものの、結果的には町の財政を圧迫しないことができています。

(2) 教育全般についての意見交換（町長提案事項）

① ユニセフとの連携事業の開始について

片山町長：この事業は保健福祉課で担当している。子どもの貧困について日本ユニセフが国内の状況を調べたところ、日本の貧困格差は世界先進諸国の中で米国と並んで最下位の方である。子どもたちが食事も与えられない状態や教育格差も開いている状態が見られ大問題であることから、作業のひとつとして「日本版CFCIモデルチェックリスト」によるチェックを進めている。日本の子どもたちの何が問題で、どうすれば政策的に救えるのか、格差を無くせるのかという観点で、全国5つの自治体で取組を進めている。こうしたことに本町も参画していく旨、皆さんに報告する。

② 学校施設等の整備について

片山町長：近藤小学校の児童数推移について、今後の施設のあり方を議論いただき、相談しながら対応を進めていきたい。また、学校給食センターについては、建築当初の建築費削減により小さな施設になった。今後の子どもの数増加に対応するには、現在試算で2億円程度の増築工事費が必要となるが、このことについても現場と協議しながら対応を進めていきたい。教育委員会においても、将来の学校給食のあり方を含め議論いただきたい。給食費について、無償化をしている自治体もあるが、本町では値上げしないという思いを教育委員会に伝えており、その通り対応いただいている。地元の安全な食材を使うなどについても、子どもの豊かな食のために今後も議論いただきたい。また、総合体育館周辺整備についても、教育委員会において引き続き議論いただきたい。

菊地教育長：近藤小学校体育館の改修を除き、学校関係では大きな施設改修はひと通り終わってきている。近藤小学校の児童数増加が今後の課題。近藤小学校の今後の学級編成を考えると、平成31年度までは平成29年度に増設した教室を含め十分対応できるが、平成32年度から複式での学級運営を考慮すると徐々に困難度が増す。地域との懇談の場でもこうした意見が出ており、特に平成34年度には複式の上限人数の学級も出てくるなど、学級配置が一層困難な状態となり、更に広い教室が必要となる。時限的にプレハブを置くか、内部改修が良いのかなど、検討を進めていく必要がある。ただ、平成36年度には児童数が減少に転じる見通しであるなど、先行きが不透明なところも多い。

片山町長：人数増加に応じて学級を分けるなどの対応は可能か。財政的負担がより大きい施設面だけの対策だけでなく、教員配置などの面からも検討す

るとよいのではないか。

菊地教育長：学級を特別に分けることは可能。しかし、道教委の教員配置基準から外れるため、町の単独経費で教員を任用して分けた学級に配置することとなる。そうしたことも選択肢のひとつとなる。

片山町長：学校給食センターに関する教育委員会内の議論の様子はどうか。

菊地教育長：これまでは、子どもの数が増える見通しであることから、この視点からの施設拡充について検討してきたが、アレルギー対応についても今後考えていく。このことについては、本日開催した教育委員会議においても協議したところ。

③ 有島記念館牧野周辺地区の活用について

片山町長：有島記念館についても、教育委員同士の情報共有のほか、今後色々な提案をいただければ有難い。

④ ふるさと教育の推進について

片山町長：ふるさと教育について、各市町村の実態を見ていると相当力を入れている。さまざまな取組が行われているので、本町でも強化いただけると有難い。

菊地教育長：平成31年度教育行政執行方針にも記載したが、現在、ニセコ学の取組を学校主体で進めている。ニセコ先生として地域の方々に学校に来てもらい交流するという内容で、ふるさと学習を具体的に検討中である。例を挙げると、下田教育委員はこれまで何度も中学校や高校を訪れ、外部講師として活躍いただいている。

片山町長：子どもたちが有島記念館で学習する機会はあるか。

菊地教育長：まだ具体的な学習の機会、仕組みはできていないが、有島を学ぶこともニセコ学の取組に取り込み、例えば、何年生になったら有島についてこんなことを学ぶなど体系づけていきたい。このほか、貼り絵作家の藤倉英幸先生により、子どもたち向けに貼り絵教室を開いていただくことを考えている。また、スポーツ分野では、登山などの新たな自然体験メニューもふるさと教育の一環として検討中である。

片山町長：そうしたアウトドア活動なども、学校教育の授業として取り込むことはできるのか。ラフティングを1回も体験したことがない子どもたちがいれば、それはもったいないことだ。

菊地教育長：学校教育と社会教育の両面から実施していきたい。

下田委員：ラフティングについて説明すると、従来はPTAによる任意の活動として親子レクの際に行っていたが、全員の子どもの体験できるものではなかった。平成30年度からは小学5年生の宿泊学習のカリキュラム変更

に伴い、5年生全員がラフティングを体験できるようになった。また別件だが、ふるさと教育の一環としてヘリコプターで空から郷土を見る取組を実施していたが、今年度までの実施で終わることとなった。珍しいオンリーワンの取組として好感を持っていたので、今後も事業終了を惜しむ声は出てくるものと思う。これに代わり、熱気球を学校の校庭で揚げる、あるいは冬の雪面をゴムボードに乗ってもらうなどの新たな体験を実施していけるとよい。

片山町長：ヘリコプター体験は本来、学校の授業の中で実施したかったものだが、学校に迷惑をかけないという配慮から、社会教育事業として対応してきた経緯がある。学校の意見や対応を踏まえ、関係者でしっかり話し合って今後の対応をしていけるとよい。

菊地教育長：学校における働き方改革の動向を踏まえると、教員には授業を通して必要な力を子どもたちに身に付けさせるということに専念させる方向にあり、これを周りができることで応援していこうという流れにある。このため、学校教育においてヘリコプター体験を授業に組み入れることは大変難しい。せめてスキーだけは、学校教育と社会教育が合致して以前から取り組んでいるので、コミュニティ・スクールの取組などとも連携しながら今後発展させていきたい。

片山町長：このほか、ニセコはいろいろなアウトドアの体験メニューがあるが、例えばニセコビレッジの「ピュア」に様々な理由から行ける子、行けない子がいると思う。経済的な理由からニセコでの楽しみを体験できない子どもがいる状態を解消していきたい。事業者の協力を得ることもできるので、新たな体験事業についてまた提案いただきたい。

日野浦委員：大変残念だったこととして、中学校の職場体験発表会の折に中学生に質問したところ、有島記念館に行ったことがある生徒が10名いるかいないかであった。例えば社会科の時間に有島記念館を訪れてはどうかなど、教育委員会内でも議論してきたところだが、ぜひそうした機会づくりについてニセコ学取組などで今後も検討して欲しい。また、記念館周辺は多様な植物も豊富であり、そうした自然に触れることも良い経験となる。

越湖委員：放課後子ども教室の活動の中で有島記念館に児童を連れて行き、公募絵画展を一緒に見学してきたことがある。現在、少なからず学校においても有島を学ぶ学習は行っているようだが、多方面からこうした取組ができるとよい。このほか、(町の景観条例で指定された)ふるさと眺望点に行ってみるなど、子どもたちが楽しんで取り組める仕組みを考えていくとよい。

片山町長：公募絵画展はレベルが高く、学校からバスを出して見学に行く価値は十分にある。記念館のような地元のものをより活用していく仕組みがあるとよい。ふるさと教育について、引き続き議論いただきたい。

⑤ ニセコ高校の将来について

片山町長：ニセコ高校は今年、出願段階で定員割れとなったが、毎年こうした状態で一喜一憂していくことを続けると、ニセコ高校は将来性があるのかということについて危機感を持つ。近隣の高校を含め今のような状態の中で、小さいパイで生徒を奪い合うようなことをしていて真っ当なのかと感じる。高校自体は、町の活性化においてなくてはならないものである。しかし、今の状態で生徒を集めていくことが町にとって良いことか疑問に思う。これは相当議論が必要であり、何らかのテーブルを設ける必要がある。ニセコ高校の将来像について、町長側で進めて欲しいという教育委員会としての結論があれば私の方でその提言を受けて進める。あるいは、教育委員会としての方向性を出して、これに町で係わってほしいというのであればそのように進める。いずれにしても、ニセコ高校の将来像を議論するのはどのように進めるのがベストであるか、ということを教育委員会内で議論いただきたい。これまでは教育委員会に首長が意見する場は無かったが、法制度として総合教育会議の場ができ、首長が堂々と意見を述べるができるようになった。基本的には教育委員会の独立性を尊重しているので、こうした高校の課題についての協議の提起の仕方を悩むところ。

下田委員：これまでも、ニセコ高校振興対策会議の場などで議論している。

片山町長：こうした会議では、これまではどちらかというと内部的な支援、振興策の検討が中心であった。こうした経過を考えると、従来の中では将来像について議論になるのか疑問。高校の存続も含め、高校の在り方そのものについて総合的な話をする必要があり、その前提として、教育委員会議などにおいてまず議論いただくべきと思う。

日野浦委員：高校の在り方について、議会議員からは話題に出ないのか。学校の意見発表会などにも議員の参加が少ないように見える。また、役場職員や保護者の参加も少ない。高校に関心が無いのか疑問に思う。

片山町長：役場職員を含め、ゆとりの無い方が大変多い。教育委員会として、協議を進めていただきたい。

⑥ 今後の機構改革等について

片山町長：過去に役場の機構改革について庁内で議論した際、スポーツと文化に関することについては町長部局で扱うべきとの方向が出された。これについて、当時は引き続き現状の通りとしたが、今後、教育委員会内でも議論して欲しい。関係し、九州の篠栗町では役場窓口業務の多くを民間委託化している。また、役場の窓口の一部や問い合わせ対応などのA I化を検討している自治体もある。今後、会計年度任用職員制度の導入と関連し、全体の職員バランスの中でどこに政策的なものを設けていくかなどを考え

ていく必要があり、スポーツと文化の両分野の在り方については、教育委員会内で議論を進めていただきたい。

菊地教育長：機構改革について、学童保育に関し教育委員会で考えていることは、学童保育だけを教育委員会で新たに所管するのではなく、子ども支援に係わる行政全体を子ども支援課、あるいは子ども未来課といった組織で担っていくことを考えている。健康や医療の分野を除き、就学前の子どもの育ちに係わる部分全体での機構改革を考えていく必要がある。現状でも、子育て支援センターでは所管分野、仕事の区分について悩むことがあり、保健師などの人材配置や役割分担とあわせて考えていくべきである。

片山町長：私からの提案は以上だが、最後に問題意識だけお伝えしておきたい。以前、教育委員も視察した豊後高田市の取組として、市塾を設けることで子どもたちの居場所の提供や学力向上などで成果を上げている。スポーツも大変盛んである。また、白馬村での白馬高校に関する取組も大変参考になる。これら全国には優れた取組がたくさんあるので、教育委員にも今後の参考にさせていただきたい。

(3) 教育全般についての意見交換（その他）

下田委員：1点目として、ニセコは大変子育てがし易い環境にあるが、英語教育について、世界に冠たるリゾート地としての利点を生かした教育実践の可能性がまだあるところと思う。2点目として、スキー学習について、先日アスリート訪問の機会があったが大変すばらしい内容であった。こうした人材を輩出するニセコに誇りを持ち、ニセコ高校に進学する子どもが増えるような方向を検討していきたい。3点目として、SDGsの取組に関係し就学援助制度の支給認定において、民生委員の役割、助言のありかたを含め、手当てが必要なところに手が届く取組のあり方についてさらに考えていきたい。4点目として、問題行動が表面化している児童生徒やその家庭について、児童虐待などの社会的課題と関連し、町としての対応のあり方に留意していきたい。5点目として、子どもの居場所づくりについて、町民センターやあそぶっく以外に雨天でも体を動かせる場所が欲しいという子どもたちの意見がある。このことも考えていきたい。6点目として、幼児センターの休日保育における保育ニーズとのアンマッチが課題である。7点目として、学校で特別授業に入った際、子どもたちから将来ニセコに戻ってきた時に住む所がありますか、という質問を受けた。ニセコへのUターン者の受入、支援の在り方についても考えていけるとよい。

越湖委員：英語教育の充実について、インターナショナルスクールとの連携を

深められるとよい。例えば、ニセコ高校の1室をインターナショナルスクールの教室として利用し、同じ施設内で高校生などとの自然な交流ができるようすると面白い。そうした環境にあれば、高校で観光を学んだ生徒がニセコに帰ってきて、国際的な環境を生かして働きたいということにもつながるのではないか。また、マレーシアYTLとの生徒間交流においても、スカイプなどインターネットを活用した顔が見える交流なども可能。このほか、放課後子ども教室でもインターナショナルスクールと交流してけるとよい。

日野浦委員：英語教育に関し、先日行われた小学校での英語公開授業の内容は大変良かった。始めは堅かった子どもたちの様子がだんだんほぐれ、活発に活動していた様子を見ると、英語を学ぶ環境づくりにいろいろな発想をもって取り組む必要性を感じた。これには教員の理解も必要と思う。

菊地教育長：小学校英語の先行実施1年目でも、この1年で子どもたち、教員の様子はかなり変わってきたと感じている。

片山町長：下田委員の3点目について。民生委員の役割に関し、民生委員の活動にも限界があるのが実態であるので理解願いたい。就学援助制度では、学校長の見解を受け、最後に判断するのは教育委員会であるので、実情に応じて目安としての判断基準を柔軟に運用していくとよい。また、基準自体の見直しも検討するとよい。

菊地教育長：支給認定基準（認定倍率）の変更については、現在検討中である。また、これまでのケースでは、基準を超えている場合でも実態に応じて検討を重ね、適切な判断に努めている。

片山町長：下田委員の4点目について、実際の問題があるのであれば迅速な対処を進められるとよい。

菊地教育長：具体的な事案については、既に現在対処中である。さまざまなケースがある中、家庭に問題がある場合も考えられるので慎重に対処していく。

片山町長：下田委員の5点目について、子どもの居場所の問題は何とかがしていかなければならない。子どもの遊びがいかに大事かは、幼児センターでも考えているところと思う。現在、そうした場を具体的に挙げられるとすれば、中央倉庫群は冬場特に空いていることが多いので、トイレの問題などはあるが今後活用の検討余地がある。

片山町長：インターナショナルスクールとの交流については、今後もぜひ検討を進めていただきたい。学校とは、町と議論の場を持つことに理解を得て

いる。教育長には、教員を含めた現場での交流をさらに進めていただきたい。このほか、地域人口ビジョンに関し、ニセコの特徴的な人口構成について、社会増減の要素があるものの全国的にも注目され、研究の対象にもなっている。また、町内の住宅不足について民間投資をさらに働きかけているが、水道供給や下水道整備などの課題もあり、SDGsの取組とあわせて今後対応を進めていく。

4 その他連絡事項

なし

5 閉会

片山町長：今後、議題があれば随時この会議を開いていきたいので、教育委員からもぜひ相談願いたい。本日は貴重な時間をいただき、ありがとうございました。

終了